

なつかしの阿木川

ナカノビジテック

大橋 一弘

主題 「なつかしの阿木川」	ページ
1. 阿木川の全容と歴史	4
i 阿木川の環境	4
ii 阿木川周辺と木曾川	4
iii 阿木川の過去と現在	4
イ 焼山から阿木川ダムまで	4
ロ 阿木川ダム	5
ハ ダム直下から阿木川公園	5
ニ 阿木川公園から溪谷入口	6
ホ 溪谷	6
2. 阿木川の動物と植物	12
i 植物について	12
イ 恵那地方の植物について	12
ロ 阿木川流域の特殊な木々	13
ii 動物について	13
イ 哺乳動物について	13
ロ 鳥類について	13
ハ 川辺の動物について	14
ニ 昆虫について	14
ホ 魚類について	15
3. 昭和20年代での大井町栄町の人々の生活	16
i 敗戦直後の情勢	16
ii 恵那市大井町栄町の位置	16
iii 当時の栄町の人々	17
iv 大井町栄町の子供達	18
4. 人々と川との関係の変遷	20
i 江戸時代	20
ii 明治時代	21
iii 大正時代	22
iv 昭和時代	23
5. 子供達の川への興味の変遷	27
i 大人たちの川の利用	27
イ 昭和20年代での大井町栄町に住む人々の川の利用	27
ロ 昭和20年代頃からの用水付近での人々と水との関係	29
ii 子供達の川への興味の変遷	30

イ	子供達の川への感情	30
ロ	昭和20年頃からの子供達の川、用水、溜池での遊び	31
iii	現在の里川について	32
6.	現代での人々と水との関係	40
i	今までの里川の解釈	40
イ	里川として考えや易い水の利用と難しい川の利用	40
ロ	身近な川や用水の利用	41
ii	現在の里川について	43
イ	川や用水の環境の改善	43
ロ	近隣の人々の愛着	44
iii	終わりに	45

「なつかしい阿木川」

序

私は、昭和16年8月、現在の岐阜県恵那市での阿木川下流の地に誕生し、高校を卒業するまで、この地で生活していました。これは 1941 年の太平洋戦争開始直前から高校3年卒業の1959年までの18年間になります。ちょうど、その時代は、戦争、昭和20年の敗戦、それからの立ち直りと激動の時代でした。また、昭和30年代になると、もう戦前ではない、と言って、生活に少し余裕が生まれ、生活環境も少しずつ変わっていった時期でした。しかし、私が子供の頃の昭和20年代は、まだまだ、戦前からの多くの古くからの習慣や人々の生活が残っていた時代でもあった。水の方面で考えると、この昭和20年代の頃のこの地方では、まだ、水道もなく、井戸と川とで生活をし、特に川とは今と比較にならないほど密接な関係を保っていた時期でした。そこで、この阿木川での当時のこの川周辺の環境や、川の環境を調べ、人々と川との関係、子供達の川への執着を調査し、現代での里川への参考資料としたいと思います。具体的な検討内容は下記の順に調査したいと考えています。実際は、現地で調べる事が多いと思います。久しぶりに故郷へ出かけて楽しみたいと思います。

1 阿木川の全容と歴史

私の故郷、岐阜県恵那市大井町には、阿木川と言う木曾川の支流の一つである川がある。その川を里川の一つの例にならないかと思い、ここに紹介する。

i. 阿木川の環境

岐阜県恵那市は岐阜県の南西部に位置し、長野県、愛知県に隣接した東濃と言われる地域の一部で、市庁舎の位置は東経137度24分59秒、北緯35度26分45秒である。

地質では、本州中央部をほぼ南北に横切っているフォッサ・マグナの糸魚川、静岡線の近くにあり、その近くの恵那山から北西に延びている阿寺断層、そこから東西に走っている屏風山断層、それに美濃飛騨山地に囲まれた平均海拔360～380メートルの丘陵地、台地があり、その低地を恵那盆地と称し、その盆地の一つが、私の故郷の恵那市大井町がある大井盆地である。その盆地の中央にある市庁舎の標高は海拔279.9メートルである。

地形は、東方に木曾山脈(通称南アルプス)の恵那山が見られ、その南には、焼山(標高、1709m)、鯉子山(同1506m)、大川入山(同1590m)と1500メートル級の山々が連なり、南方には、保古山(同969m)、花無山(同770m)、夕立山(同727m)、屏風山(同794m)と山頂に広い平坦面を残した山並みがある。北方には、美濃飛騨山地の笠置山(同1128m)が見られ、その麓で、大井盆地の北側には、木曾川が流れている。

気候的には、海岸線より離れ、やや内陸的で、また、山間部の気候で、恵那測候台の平均気温は12.7℃と岐阜市のそれの14.7℃とは2℃程低く、最高温度の年平均値は、岐阜市より1℃低く、最低気温の年平均値は3℃低い。また、最高温度の極地では37.1℃、最低温度のそれは-14.1℃と冬季の冷え込みはかなり厳しい。降水量は1886ミリと岐阜県では比較的少ない地帯であるが、月別では、6月、7月、8月、9月が200ミリ以上と、夏季及び台風の季節に多く、冬季の降水量は少ない。

ii. 阿木川周辺と木曾川

この阿木川は、上述の如く、長野県木曾谷を水源として、木曾谷から岐阜県東濃地方を流れ、岐阜県と愛知県の県境に沿って伊勢湾に注ぎ込む木曾川の支流の一つである。木曾川の支流の中には、比較的大きな支流に、飛騨山地や飛騨美濃山地から南下している飛騨川や付知川があり、中規模の支流には恵那山地から北上している恵那盆地の中津川やこの阿木川がある。[蛇足だが、この恵那山地から西に流れている川には、土岐川(庄内川)水系の川がある。]また、阿木川下流の木曾川には笠置ダム、丸山ダム、今渡ダムがあり、阿木川は、伊勢湾とは完全に隔離されている。

iii. 阿木川の過去と現在

現在の阿木川は、全長21キロメートル、河川総面積は133平方キロメートルで、中津川市阿木の焼山中腹の標高1300m付近を水源とし、大井ダムの直下、海拔230メートルの木曾川に合流している木曾川支流の、一級河川の中規模の川である。しかしながら、この川には、上流の小さな溪谷、中流のダム、下流の扇状地と河岸段丘、最下流の中規模の溪谷を有す、意外に変化の富んだ川である。そこで、この川を5区分に分けて、少し詳細に報告しよう。

イ 焼山から阿木川ダムまで

上流は、恵那山系の頂点恵那山から南南西にある焼山の中腹、海拔1300付近の西斜面を水源とし、

北方の天狗森山と南側の阿岳の尾根に挟まれた、木々の生茂る森林の中の急斜面を、小さな溪谷の岩々の間を約7km程かけて水が流れ落ち、天狗森山の裾野に開けた、棚田が広がる、シクラメンの栽培でも名高い、標高約500mの中津川市阿木地域まで達する。更に、川幅6m程、深さ約1mの川床に直径20cmの石がごろごろある川を成形しながら阿木集落の中央を下り、更に3km下流の屏風山断層の直下に出来たダム(満量時、標高約400mの湖水)まで流れ落ちている。阿木部落の中央に掛かっている石橋が、崩れたままあり、この付近の阿木川は相当の暴れ川のようなものである。尚、ほぼ、水源の近くまで、狭い道ではあるが、相当入り込んでいるが、その流れを観察することは出きるようである。

ロ 阿木川ダム

水源から約13km 下流のこの中流域には、前述の如く、屏風山断層の花無山と夕立山の北西部にある長島鍋山台地の谷間で、断層の破砕帯が見られ、その地点から直接平坦な大井盆地に流れ出た場所がある。この地形を生かして、水資源機構が、洪水調節や河川環境の保全等、及び東濃用水や愛知用水の上水道用、工業農業用水用の確保の為に、新規利水の供給として、この地に、昭和56年8月からダムの本体工事を着工し、平成3年3月に完成した阿木川ダムがある。そのダムの内容は

位置	岐阜県恵那市東野字山本及び字花無山
河川名	木曾川水系阿木川
型式	中央土質しゃ水壁型 ロックフィルダム
堤高	101.5メートル
堤頂長	362メートル
堤体積	490万立方メートル
堤頂標高	417.5メートル
流域面積	81.8平方キロメートル

能力は

総貯水量	4,800立方メートル
洪水調整水量	1,600立方メートル
新規利水供給量	最大 4.0立方メートル/秒
発電能力	最大2,700kW(ダム管理用)

である。

ハ ダム直下から阿木川公園、

800m前後の高さの山々で成り立つ屏風山断層直下の標高約330mから約3km下流の標高約280mの阿木川公園までの流域を示す。ダムの出口から直ぐ、水は、長島鍋山台地と花無山との間の深い谷間を700mほど流れ、大井盆地の入り口に至る。その入り口では、鍋山の裾野を、急流によって形成された、過っては、相当急流であったと推測される、深さ約3m、幅15m前後の大きく湾曲した河岸線に出会う。更に、この流れは、左岸の鍋山の裾に沿いながら、右岸では、この川の支流である飯沼川が造った扇状地を見ながら下流へと北上する。その後、右岸には、東野の扇状地から平坦な盆地へと、広い農村風景が拡がり、その奥には、昔、阿木川が創った東野から武並神社の河岸段丘が南北細長く続き、更に、その奥は保古山の裾野が拡がっている。左岸は鍋山の裾野が広がっている。

また、この川の最大の支流である前述の飯沼川は、阿木川公園南端、500m の地点で合流し、この川の水量を増している。この川は、保古山を水源とし、花無川の断層に沿って流下し、平坦な盆地に入り、小さな扇状地を造っている。その端にある東野には昔から地下水が恵まれ、多くの地点で、清水が湧き出ている。

大井盆地では、農地の下を河川が流れ、直接用水として水を引く事が出来なく、そこで、この盆地でも比較的高いこの地点に、農業用水他の用水の給水口が多く設けられている。恵那市史によれば、既に、江戸時代にもこの地点にかなりの多くの用水の給水口があったようである。

ニ 阿木川公園から溪谷入り口

標高約280mの市民の憩い場である多目的公園の阿木川公園から、大井盆地の最も平坦な土地に形成した市街地を東西に分け、同約260メートルの溪谷入り口まで流れる約4kmの流域について述べる。この流域は、この川中で最も緩やかな流れで、川幅も50m程と広く、両岸には、高さ約2mほどの堤防が築かれている。明治8年の大井村絵図によれば、右岸のこの公園から下流の市街中央に掛かっている江戸時代大井村の唯一の橋であった中山道の板橋(阿木川橋)で、現大井橋までにかけて中島があり、その後、右岸の方が埋め立てられ、現在の流れになったようである。この土地には、戦争直後に、製紙の工場が建ち(昭和20年代に恵那山系木材を原料として工場を設立したが、直ぐに、原料不足となり、現在では他地域から原料を購入して稼動している。)、その排水が、昭和20年後半から現在まで下流の水質に大きな影響を及ぼす事になる。

その下流からは、約4mから約6mほどの堤防が構築され、両岸に面した一部の低地の水害を防止している。しかし、その多くは、その堤防の高さまで土砂で埋め重ね、その上に、家々が建ち並んでいる。一方、その両岸から東西に離れるにつれて、土地は次第に低くなっている。また、公園より3km程下ると、堤防の高さは低くなり、昭和30年代頃まで人が住んでいた中島があった場所に至る。当時は、たびたびの川の洪水で、中島との橋が幾度も流れ落ち、長い間、人の出入りが困難となった。それを解決するために、河川改修をし、現在では、左岸と陸続きになった。現在では、残念ながら、その面影は完全に見られなくなった。

この流域の右岸では、低地が広がり、ほぼ500m程の巾で南北に平地が続く、その一部は、江戸時代の中山道の宿場町として栄えた家並みが、今でも残っている。その奥には、上流から約10m高さの御所の前、野畑の河岸段丘が南北に続いている。その御所の前の段丘では、その一部の地に、小学校、高等学校、中学校が建てられ、学校街を成している。その他の多くと野畑の段丘には、田畑が広がり、田園風景を醸し、更に、その奥には、小高い台地があり、恵那峡へと繋がっている道の両側に民家が多く建っている。一方、左岸では1000m程の巾の平地が広がり、中央線恵那駅を中心に市街地を形成し、同市の最も繁華の街として栄えている。その奥は小高い台地が見られ、その一部は公園となっている。

その下流では、支流の一つの永田川が合流し、更に、水量を増しながら北上し、左岸からは台地が、右岸からは段丘と台地とが迫り、溪谷の入り口へと進んでいく。

ホ 溪谷

標高260mの溪谷入り口から同230mの木曾川合流地点までの約2kmの流域である。両岸の標高350mから 360mの台地が迫っている狭い谷間の間を流れながら、中型の溪谷を形成し、流れ下って

北上している。溪谷の入り口には、大正8年3月に着工し、同年10月に完成した大正時代から昭和の初期に掛けて、大井町への電燈用の電源として建設された奥戸発電所用の給水口があり、そのための堰が設けられている。しかし、現在では、その堰のほとんどは、土砂で埋まっているが、現在でも、その支流の濁川の水と共に、給水は行われ、右岸に沿って水路を設け、1754mの距離を通水して下流の木曾川合流地まで流している。また、本流は、兩岸の台地の間を東西に曲がりくねりながら、川の底面を削り、基盤岩を露出しながら、その岩々の間を流れて溪谷を形成している。この兩岸には民家は見られず、自動車が一台通れるほどの狭い道と市浄化センターがあるだけの、雑木が密集し、鳥達の鳴き声が良く聞こえる静かな流域である。最も下流の木曾川合流地点の直前では、右岸に、前述の有効落差30.7m、使用水量毎秒約2.1立方メートルの中部電力管轄の小さな奥戸水力発電所があり、細々と稼働している。また、その施設に行くための釣り橋も掛かっている。直ぐそばには、木曾川を堰き止めた、恵那峡のある、日本最初のダム式発電である関西電力管轄の大井発電所があり、それと対比すると面白い。

参考文献

- | | |
|--------------|--|
| 恵那市史 通史編 第一巻 | 昭和58年11月10日 発行
編纂 恵那市史編纂委員会
発行 恵那市
印刷 太洋社 |
| 同 第二巻 | 平成元年3月31日 発行
編纂、発行、印刷 同上 |
| 同 第三巻上 | 平成5年1月25日 発行
編纂、発行、印刷 同上 |
| 中山道美濃十六宿 | ‘97年7月22日 発行
発行人 高橋将人
発行所 郷土出版社 |
| 恵那市の自然 | 平成9年3月 発行
編集者「恵那市の自然」編集委員会
制作 ヨツハシ |

2 阿木川の植物と動物

阿木川流域は、前述の如く、海拔300m程の盆地や河岸段丘、同400m前後の台地、1000m級の高原、及び1500m級の山々と非常に富んだ地形をしており、温暖な気候と年間約2000ミリ前後の恵まれた降水量と、幾多の河川、湿地とに恵まれ、多種多様の植物、動物が生息するには、比較的適した環境にある。しかし、冬季は、かなり温度がさがり、また、最近では、人工開発のための自然破壊が極端に進み、動植物の生育にも大きな変化を及ぼし、種類、数ともに激減している。この項では、恵那地方全体の動植物について紹介し、阿木川流域のそれも紹介する。

i 植物について

岐阜県の東部東濃地域には、山や高原及び丘陵地帯がひろがり、降水量も適度にあり、森林が繁茂するのに適した環境である。しかし、最近では、この地にも多くの人の手が入り、森林も減少している。また、残った森林も、伐採された二次林とわずかのモミ、ヒノキ、スギの植林地域があるのみで、その一部では、それらの単独森林も多少見られるが、原始林は皆無に近い状況である。また、二次林も最近の伐採した森林が多く、若い二次林が多く広がっているため、現在では、生茂った森林らしい森林は少なく、残念ながら、自然林を楽しむには、1000m級の高原か、それ以上高い山々に行かなければ見られないのが現状である。

イ 恵那地方の植物について

この地方の二次林には、一般的な森林として、コナラを主体とする落葉広葉樹と、アカマツを含む針葉樹との針広混合林があり、コナラ、ゴヨウマツ、アカマツ、ヒメシャブシ、アオハダ、イヌシデ、クヌギ、カスミザクラ、ヤマザクラ、ウリカエデ、ヤマモミジ、イタヤカエデなどが主要な樹種としてあげられる。

自生植物としては、暖帯性のシイ、カシ類のほか、アベマキ、アカメガシワ、ネザサ、メダケ、ユズリハ、コバノミツバツツジ、シロモジ、シキミ、ヤブツバキ、モチツツジ、ヒサカサで、いずれも表日本、または、暖帯地域の中心から北上したもので、恵那地方はこれらの北縁部になっている。また、一方では、ユウスゲ、ママコナ、ワレモコウ、オミナエシ、キキョウ、マツムシソウ、ナンテンハギ、コオニユリなどのように北方から南下した植物もある。

阿木川の支流飯沼川上流(小野川)の水源近くの海拔900mに、根ノ上高原があり、岐阜県立公園として胞山公園と命名された場所で、自然豊かな高原がある。この高原一帯は、暖帯植物の北限に近く、植物が豊富で、変化に富んでいる。その高原の一角に保古の湖があり、その周辺の高原植物について、興味深げな所を選んで紹介する。この湖の東側の高原には、アカマツ、ベニドウダン、ヨソゴ、アセビなどの林があり、全般的にみるとツツジ科の植物が豊富にある。初夏には、アズマツリガネツツジ、コバノミツバツツジ、レンゲツツジ、ヨウクラツツジ、バイカツツジ、モチツツジ、ミツバツツジ、ネジキ、アセビ、ウスノキなどがあり、それらの新緑が陽光に映え、花が美しく高原を彩る。秋になると、高原に広がっている草地に、ススキ、マツムシソウ、カルカヤ、オミナエシ、ワレモコウ、リンドウなどが花をつけ、高原の風景をあでやかにしている。また、その東側の所々の樹林には、湿原があり、この地帯では、サワシロ、ミズゴケ、サギソウ、イヌノヒゲ、ヒメシロネ、ムラサキミミカキグサ、ミミカキグサ、サワギキョウ、ミズキグサ、モウセンゴケ、シワショウブ、ミスギボウシ、ヤマドリゼンマイなどの湿性植物が数多く見られる所で、植物観察を楽しむには良い場所である。

ロ 阿木川流域の特殊な木々

この流域には、ハナノキとヒツバタゴの自生地がある。これらは、この地方独自の植物で、ここから北部にはなく、南部でも、岐阜県瑞浪市あたりが極限になっている。

ハナノキは、主に木曾川流域の山間部の湿地に自生する落葉喬木で、カエデ科に属し、秋に紅葉する。阿木川の支流流域の一部、三郷町には、300平方メートルにわたる自生地があり、大小6本の高さが20mのものもある。雌雄異株で、雄花は若葉が出る前に咲く真紅色の花で、これが陽に映えて美しい。ハナノキの名称は、ここから生まれたものらしい。蛇足だが、私の卒業した恵那高校の校章は、このハナノキの葉を図案化したものである。

ヒツバタゴは中国、台湾、朝鮮半島にもあるが、日本では対馬と東濃地方だけに自生し、阿木川流域にも見られるが、とくに北側の笠置山付近に多い。別名、ナンジャモンジャ、大道木とも呼ばれ、花は5月中旬から下旬にかけて咲く、枝の先に白い花が群がって咲くので、満開のときには、雪がかぶったように美しい。

ii 動物について

山に囲まれた恵那地方は、動物としても住みよい環境に恵まれ、多種多様の動物、魚類が生息し、特に、この地域の何れの川も、恵那山地や美濃飛騨山地から直接流れ出た、極めて清澄な水質に恵まれた川で、種類、数とも多くの魚類が生育していたが、最近の都市化、工業化や開発が進むにつれて、生育場所が奪われた。また、鳥類では、それに加えて、狩猟が盛んになるとともに、乱獲されて減少し、全般的には、何れも減少の一途をたどっている。

イ 哺乳動物について

恵那地方で見られる哺乳動物には、ホンドキツネ、テン、アナグマ、イタチ、ニホンクマ、ヒメズモグラ、イノシシ、ムササビ、多種のネズミ、ノウサギ、ニホンザル、多種のコウモリ、ハクビシンがいる。また、以前は生育していたが、現在では絶滅または絶滅したかもしれない哺乳動物として、ニホンシカ、ニホンオオカミ、ニホンリスがある。その中でも、「ホンドキツネは、実際に姿を見た人が多く、タヌキも藪の中や水辺の森林や人里近い森のなかなどに多く住み、夜間には人里に出、アナグマは夜行性で、里へ出て農作物を荒らし、イタチは鶏小屋や池の鯉などを荒らすことがあり、ニホンクマは恵那山系に住み、人里近くに出没し、イノシシは耕地を荒らしてかなりの被害を生じ、ネズミは食べ物を盗み、山林の若芽を食い荒らし、ノウサギも植林した若芽を食べて枯らしてしまう被害はかなり多い。また車にひかれたハクビシンを見、アブラコウモリが人家の屋根裏などに住み、良く見かける」のように、今でも被害を受けたり、出会ったりして、直接間接的にこの地方の人々が哺乳類と接触している。また、テンは、過っては恵那地方に多く住んでいたが、害獣として狩猟されて激減した。ニホンザルは、恵那地方では1から3匹くらいで行動しており、社会構成をしていないため発見され難い。

ロ 鳥類について

鳥類では、37科、84種と多種多様が生息しているといわれているが、原生林が皆無で、また、伐採が進んで二次林になったところでは、樹齢が若くて繁茂している部分が少なく、鳥類が生育するための植物、昆虫、小動物も少なく、多くの鳥が生息できる環境とし恵まれているとは言い難い状況である。その中でも、比較的恵まれた環境には、ジュウイチ、ツツドリ、ヤブサメ、サンショウウグイスなどの数が多く

いる。丘陵地帯には小さなマツや雑木が多く、ヤマドリ、ウグイス、ホホジロ、キジ、カッコウ、オオルリ、カケスなどが見られ、春になると、ヒガラ、ヤマガラ、シジウガラなどが東部の陵地帯から移動して来る。水田でよく見かけたシラサギや田園のヒバリは、農薬で減少し、カワセミやカワガラスも最近その数を減らしている。ササコ、サシバ、アオバズク、ケリなども、湿地帯が開発されたためにその数を減少している。

ハ 川辺の動物

阿木川の水は以前には極めて清澄で、好適な釣り場であったが、戦後、下流の沿岸で、工場が稼働し、その工場の汚水が流れ込み、大井町付近の川下では、一時魚類の生育が困難に成ってきた。最近では、工場廃水は排水処理により改善されてきたが、家庭排水がその汚染を助長しており、今後の下水処理の完備が待たれる。平成3年頃の本曾川との合流点の水質は、県下内でも5番以内の悪さであった。しかし、工場以南の上流やこの川の支流では、冷たくてきれいな谷川も多く残り、水田も多く、その環境に応じていろいろな川辺の動物が生育している。では、魚類意外の恵那地方で、良く見られる動物について述べよう。

アメリカザリガニ 恵那市では市街には多く見られるが、ありがたい事に、山間部にはまだ入り込んでいない様子との事。

カエル 水田には、アマガエル、トノサマカエル、ヒキガエル、ウシガエルなどがいる。また、きれいな谷川にはカジカカエルが生息し、きれいな鳴き声を聞かせてくれる。

イシガメ 普通に見られる。

サンショウウオ 笠置山の谷川に見られるが、残念ながら、阿木川流域には見られなくなった。地元ではアンコと呼んでいる。

イモリ 水のきれいなところにいる。

サワガニ 山間部の谷川にみられる。

ニ 昆虫

土地の開発が進み、昆虫の食べ物である植物や小動物が減少し、この恵那地方でも種類、数共に減少している。特に、心配されているのは、アゲハチョウ科のギフチョウ属のギフチョウで、阿木川の支流の流域で確認されたのは1969年までで、それ以降は発見されず、絶滅が憂慮されている。

しかし、恵那地方の蝶は科として9種類、種類としては99種類とまだ豊富に見られる。特に、アゲハチョウ科ではウスバシロチョウ、ジャコウアゲハ、アオスジアゲハ、アゲハ、キアゲハ、クロアゲハ、オナガアゲハ、モンキアゲハ、ミヤマカラスアゲハ、カラスアゲハが生育しているようで、蝶に感心のある人ならば、楽しみな所でもある。

トンボでは、日本では最小のトンボのハッチョウトンボが生育し、恵那市内でも各所で発見されている。その他のトンボとしては、ヤンマ科、イトトンボ科、ムカシトンボ科、サナエトンボ科、オオルリボシヤンマ科の5種類が生育し、近くでは、夏の太陽が照りつける時期にはサナエトンボ科のオニヤンマ、ヤンマ科のシオカラトンボなど多くのトンボが飛び回り、真っ赤に成熟した雄の美しいハッチョウトンボも見られ、昆虫家にとっては、興味の湧く地帯もある。

その他の昆虫としてはアブラセミ、ミンミンゼミ、ヒグラシなどのセミや、少し林に入ると雑木には、まだ

まだカブトムシ、クワガタが見られる。

ホ 魚類

最後に最も川と関係のある魚類について話しを進めよう。恵那地方の川にはギギ科、コイ科、サケ科、ドジョウ科、カジカ科、ハゼ科、アユ科、ウナギ科の8種類があり、アカギ、ウグイ、アブラハヤ、カマツカ、ニゴイ、オイカワ、カワムツ、コイ、フナ、イワナ、アマゴ、ドジョウ、シマドジョウ、アジメドジョウ、カジカ、ヨシノボリ、アユ、ウナギ、メダカの19種類の魚類が生息していると思われる。

その中で、最も身近なものとしては、アブラハヤ、コイ、フナ、オイカワ、ウグイ、カワムツ、カワヨシノボリ、シマドジョウ、ドジョウ、アジメドジョウ、アマゴ、カジカなどが見られ、その中でも、カワムツは最も良く見る魚で、昔の子供達の中で最も親しい釣り相手であった。私達の子供の頃には別名モロコとも言っていた。同様に、一般的な魚にはそれぞれに別名があり、親しまれている。アブラハヤは味が悪く、クソンプツとかクソンバエと呼び、ウグイは味が良くアオウオと言っているが、なかなか釣れないので、重宝がられている。オイカワは雄をアカモト、アカダ、アカヒレ、雌と幼魚をシラハエと呼び、親しまれ、ヨシノボリではオオクマザケッコ、スイツキ、ドウセン、ヒデリカジカ、その他多くの呼び名があり、腹側に吸盤を持っています。良く、子供達が捕まえて来る数の多いな魚である。私達子供頃は、カジカと同様にザッコといふ意外においしかった事を思い出す。シマドジョウはカワドジョウ、ムギナ、ムイカラドジョウ、ムイカラ、カンナメドジョウなどと多くの呼び名があり、水田の水路や小川の砂底に生息し、ドジョウ、フナと同様に、昔の子供達での魚取りの対象魚であった。アマゴは清流の各所で見られ、タナビラ、アメノウオ、アメなどの呼び名がある。現在の釣り人と目標の魚でもある。カジカも比較的清水を好み、ウタウタザッコ、オタフクザッコ、カブッチ、カブ他の呼び名も多い。フナは小川や用水路の草の茂っているに多く、溜池にも見られた。コイはダム、淵の水流のゆるやかな所に多く住み、釣り情報に良く阿木川ダムで釣った記事が載っている。ドジョウは用水や小川の泥の下に生息し、アジメドジョウは清流に住み、味のいいところからこの名称が出たと思われる。

アユ、ウナギ、サクラマスは、昔の阿木川では見られたようですが、今では、木曾川のダムで阿木川が海から隔絶されており、自然の状態では生育できない。アユは毎年琵琶湖産の稚魚を放流し、補っている。ウナギも時々用水路で見られるが、放流されていないため、ダムを這い登って来たか、料理屋から逃げたしたものと考えられる。メダカは残念ながら阿木川流域では既に見られなくなり、笠置山の麓の一部には今でも見られるようである。

参考文献

恵那市史 通史編 第一巻 内容は阿木川全容と歴史と同じ

恵那市の自然 同上

3. 昭和 20 年代での大井町栄町の人々の生活

この項では、当時の終戦直後の世情と、その世情の中で、たくましく生活していたこの地域の人々と、その子供達について紹介し、次項で、如何なる状況下で、水と直接的、間接的に携わっていたかを述べ、水との関係の資料としたい。

1. 敗戦直後の世情の時代

昭和 20 年代は終戦から始まり、朝鮮戦争の終結した10年間の時代で、米軍による日本の占領と、新政府による戦争放棄の新憲法発布、そして、その後の朝鮮戦争による米国の反共方針などと大きな変革の時代であった。また、そんな中で、将来の日本が、如何なる方向に進んでいくか不明瞭で、混沌とした時代でもあった。この頃の都会では、住む家もなく、食糧も乏しく、毎日での生活の不安の中で、何とか暮らし、疎開した人々もまだ都市には帰れず、疎開の地で生活し、苦勞していた時代であった。しかし、この大井町では、戦時中でも、飛行機による空爆どころか機銃照射もなかったお陰で、戦時物質として徴集された家が、所々に取り壊されて、消滅したのを除いて、幸いにも、ほとんどの建物や道路などが戦前のまま残っていた。また、占領軍であったアメリカ兵も、観光でジープに乗って、名古屋方面から、大井町北部にある恵那峽を見学に来た程度で、直接、この地に住んだとか、仕事したような事はなく、占領軍によるこの地での影響もほとんど関連はなかったと思われる。加えて、当時の最大の問題事であった食糧の確保についても、この栄町の人々は比較的恵まれていた。それは、この町の人達は、近隣の村々からこの街に来て住み着いた人が多く、食糧も、都会の人々が、汽車に乗って田舎の農家に食糧を確保したのと比較し、それぞれが、近隣の血縁関係のある農家から、着物や家財の物々交換で、それなりの食糧は確保していたようで、特に、この栄町には、蛭川街道と言った 1 本の小さな街道道があり、その道の北方にある笠置山の裾野の村(蛭川村)からの出身者が多く、食糧の確保には比較的良い環境であった。また、同郷の出身が多かった関係から、この町での団結は、終戦後でも固く、祭りや他の行事などにも、町内全体が催して、まとまりがあったと事を覚えている。

2. 恵那市大井町栄町の位置

私の生まれたこの恵那市大井町栄町は、恵那市の現市街のほぼ中央部に位置し、現在では、恵那駅周辺の都市開発のために、駅周辺の多くの建物が取り壊され、駅前にロータリーの広場が出来たお陰で、駅の直ぐ東側に位置するようになった。しかし、昭和20年代当時は、大井駅(現在の恵那駅)の駅前はまだ狭く、その部分の多くには、鉄道の官舎と倉庫が建ち、また、バスの駐車場としても活用していた。そして、その奥に、この栄町があった。当時も、この町は駅に近く、徒歩で約 1 分も掛からなく、汽車の黒煙を多く浴びていた。この町には、前述の如く、駅から南へ延びている駅前道路と並行に、その東側の約100m程離れた所を南北に通っている道があり、この道を挟んで、建ち並んだ家々を中心に開けた町であり、この町には、商店街と言うよりも、住宅地といった方が良い。しかし、現在のサラリーマンの住宅地とは異なり、後述の如く、多種多様の職人が多く住み着き、一般の住居と言うよりも、その住宅兼仕事場の住居が多い。また、その道の東側にも家々の裏側には約 4m から 6m 下に阿木川が流れており、その川に直接下って行くために、それぞれの家の裏に長い梯子を架けていた。この頃は、まだ水道がなく、仕事で大量の水を要した場合、川原に下り、川の水を利用していた。また、直接、川に接していない家の人々も、時には、川原に下り、その川の水を利用していた。残念ながら、現在は、そのよう

な風景は見られない。栄町の東側のそのほぼ真中には、神ノ木橋と言う木橋が架かり、対岸の町へ出かける事が出来た。ただ、この木橋は川の洪水で、度々、流されていた事を覚えている。コンクリート製の橋になってからは橋が流された事は耳にしていない。北側は、中央線の踏み切りを通過して隣町の新栄へ、更に進むと、木曽川の方に行く事が出来た。この頃は、この道のみが木曽川の対岸にある笠置山の麓の村々へ行く唯一の道であり、木曽川を渡る橋(橋が出来る前は木曽川の川渡しのあった場所)が架かっていた。南方側は、旧中山道にある当時この大井町で最も賑やかな町であった大井銀座の道路に繋がっていた。現在の栄町は、当時とは比較にならないほど広く、駅前東側の広い地域を栄町と称している。

3.当時の栄町の人々

当時の大井町栄町に住んでいた人々達の生活について話を進めてみよう。まず、恵那市の図書館に調査に行った。新町(現在の駅前通り)については、戦前から戦後にかけて、この街の配置図と商店名に関する記録は残っているが、この恵那市大井町栄町について、昭和20年代での住居者の記録は、残念ながら、恵那市史、他の歴史書物にも載っていなかった。そこで、以前に、この街に前に住んでいた60才から70才前後の人々を訪ねて、当時の町の状況を調べたので報告する。当時は、前述の如く、現在のようなサラリーマンは非常に少なく、住居として専用の建物は、この町の30軒中6軒で、その中でも、3軒が自営業で他の地に工場などを構えており、現在のサラリーマンに当たる人の住居はわずか3軒であった。その他の建物としては、この地が当時の交通の中心であった鉄道の駅の近くであった関係から、日通の倉庫や民間の倉庫が4軒あり、時々、私が子供の頃に、恵那郡の至る所で作られていた寒天の材料である天草が倉庫に保管してあった事を思い出す。また、商店または仕事場兼住居としての建物は、30軒中20軒で最も多くあった。その中でも、町内の人々が直接日常生活のために関係した商店としては、雑貨屋と米屋があり、魚屋や八百屋も5分ほど離れた隣町にあった。今のように、自動車は全然普及しておらず、ほとんどの人は、徒歩か自転車で買い物をしており、日常の生活の必需品は、狭い範囲で買い求めている。また、床屋、新聞屋、肥糧屋などの生活に関係のある店も町内にあり、近くの商店で、日常に必要な生活物質の殆どを購入出来た。しかし、30軒中9軒とほぼ三分の一に当たる建物は、和菓子屋、うどん製造屋、鍛冶屋、染物屋、洋服仕立物屋、ブリキ加工屋などの職業を持つ職人達の住居で、仕事場兼住居であった。彼らは、それぞれが独立して生活を営み、町内よりも当時の恵那郡大井町全体から仕事を求めている。これも、この栄町が、駅の近くにあったから連絡が取り易いためと思われる。その他には、飲食店(通称飲み屋)、三味線の師匠、芸者置き場などの駅前の裏街としてありそうな職業や、歯医者、金属回収業もあり、各自それぞれが仕事を持つ人々の集まりであった。

何れにしても、歯医者や1、2軒の特別に裕福な家庭を除いて、町内のほとんどの人達は、ドングリの背比べの生活をしており、お互いに協力しあって生活をしていた。そんな関係から、戦後の混乱時にもかかわらず、町内の人々の結束は意外と固く、正月の行事の門松作り、春のさくら祭りでのサクラの花飾り作り、夏の花火大会での花火の町内で提供、秋祭りでの神輿作りなど、町内の多くの人達が参加して、準備から催し物まで協力して実施していた。現在では、駅前での広場の拡張のため、家屋の取り壊し、残っている建物の多くは飲み屋となり、その飲み屋の経営者は他の土地から通っており、実際には、この街で住む人々は激減している。昭和20年代と平成16年現在の状況を下記に示す。

- ・ 和菓子屋－現在も残っている
- ・ 理髪店－現在も残っている
- ・ うどん製造屋－現在は駐車場になっている。
- ・ 鍛冶屋－現在は飲食店になっている。
- ・ 染物屋－都市開発のため、取り壊されてなくなっている。
- ・ 雑貨屋－一般の住宅
- ・ 洋服仕立物屋－一般の住宅
- ・ 金属回収業－飲食店
- ・ 米、雑貨屋－今も残って営業している
- ・ 飲食店－今も残って営業している
- ・ 鍛冶屋－飲食店になっている
- ・ 新聞屋－住居
- ・ 三味線の師匠－飲食店
- ・ 日通の倉庫3軒－取り壊し
- ・ 染物屋－取り壊し
- ・ 肥糧屋－取り壊し
- ・ 会社の倉庫－取り壊し
- ・ 歯医者－取り壊し
- ・ 住居－そのまま
- ・ ブリキ加工屋－住居
- ・ 洋服仕立て屋－住居
- ・ 芸者置き場－飲食店
- ・ 住居－取り壊し
- ・ 住居－取り壊し
- ・ 住居－取り壊し
- ・ 住居－住居
- ・ 住居－住居

のように、平成16年には、昭和20年代にあった30軒中取り壊しの建物が12軒と最も多く、次に住居として8軒、飲み屋6軒、他の商売3軒と実際の住居者のいる家は11軒となり、新築は2軒のみである。その他の建物は、古い建物がそのまま残っている町である。昭和20年代と比較すると、この町は大変な変化であるが、残っている建物の多くは昔のままである。

4 大井町栄町の子供達

当時の昭和20年代の情勢は、戦争中の戦争一色から、終戦後の自由の風潮と、急激な変化の真っ只中にあった。大人達が、これからの生活を如何にしてよいか途惑っている時代であった。また、教育関係においても、戦争中の教科書の内容が問題となり、特に、国語は、本の文章を墨で塗るのが勉強の時間となり、本が真っ黒になるほど塗りつぶされて、教科書の役割がなくなっていた。そのような環境

化に置かれた教師達も、子供に如何なる教育をして良いかの自信が消滅し、教育全体が不透明となり、一種の無統制に近い時代になっていた。しかし、前述の如く、この地方では、戦争での直接の被害は受けず、加えて、占領軍の影響もほとんどなかったお陰で、子供達にとっては、戦争による軍や空襲の危険を知らせるサイレンなどの長い間の不自由な時代とお別れして、自由に、外で遊ぶ事が出来るようになった時代になり、遊びを謳歌できる時代になった。しかし、当時の家庭では、何れの家庭においても、生活がいっぱいで、子供達の中でも、中学生以上は、女の子は食事や掃除のお手伝い、男の子は家業の手伝いをし、その家の大切な労働の一員であった。しかし、小学生以下の子供達は、家にいると家業などの邪魔になり、外に放り出された。そこで、小学生以下の子供達は集まって、小学生の上級生を中心に自分達の世界を次第に作りあげていった。その子供達の世界を大きく分けると、男の子の世界と女の子の世界の二つがあった。現在とは異なり、当時は男の子と女の子との遊びがかなり異なり、それぞれ男女別のグループが出来あがった。これらのグループは、色々な職業の子供達の集まりで、おもちゃを作る得意な子供もおり、彼らを中心に、当時としては非常に少ない廃品や自分の家にある安い材料及び川や原っぱなどから取ってきた物を材料にして遊び道具を作った。遊びの集団は多いときには他の町の子供も含めて20名ほど、少なくとも10名ほどの集まりであった。この小学生の上級生達は自分の下の弟はもちろんの事、他の家にいる低学年や児童の面倒も見ながら、一緒に遊んだ。女の子も同様で、ただ子守りをしながら遊んだ子が多かった事を覚えている。男の子の主な遊びは、缶詰の空き缶に紐を通した缶の上に乗る遊びで「缶乗り」と言い、空き缶を広っぱの中央に置き、鬼が空き缶を蹴られないようにしながら他の子供達を見つけて遊ぶ「缶蹴り」、一寸釘を土に差して遊ぶ「釘差し」、用意したピンなどの小さな蓋に回したコマを乗せて、鬼から逃げまわる「コマ回し」、林から取ってきた細い木を刀にした「チャンバラ」、雪が積もればみかん箱で竹ソリを作り駅構内の斜面を滑った「ソリ遊び」などをした。一方、女子の遊びは、外では、輪ゴムを長く繋げたゴムひもをどれだけ高く飛ぶ「ゴム飛び」、ジャンケンをして描いた幾つもの丸い円を通る遊び、通常の「鬼ごっこ」、家の中では、中に豆を入れた袋で遊ぶ「お手玉」、毛糸を丸くつなぎ幾つの形が出来るかを競争した「綾取り」などで遊んだ。遊び場は町内だけでなく、同じ小学校の生徒同士で、他町内の広場や丘、川原などへも出かけ、他の町の子供達と一緒に遊んだ。しかし、違った小学校の生徒では、余り遊ばず、逆に、遊び場の縄張り争いをした。その内、いろんな遊びの中でも、小さい児童たちに対しても、上級生は細かな事まで良く面倒を見、他の町内の子供達が児童をいじめた場合は、その町の上級生がかばったりしており、その結末は大人顔負けほど強かった。水遊びについても、同様に、町内の子供の集まりが中心で、それぞれが遊び場を作り、皆で遊んだ。

4. 人々と川との関係の変遷

序論

人々と川との関係が、何時の時代でも、密接であったと考えるのは、私だけではなく、皆さんも思っていると思います。そして、その川の重要性について、時代によって多少は相違がるものの、それぞれの時代毎に、人々は川を有効に利用していたに違いない。また、その利用も、只、自然に利用する事から、時代が進むにつれて、川を管理する技術を少しずつ持つようになり、その川の利用を広げていった。また、灌漑用の水だけでなく、水力や川の流れを大々的に利用していた。更に、その利用も、一部の地域の利用から、地域全体への利用へと進み、更に、全国的に関与する利用へと変化していった。この阿木川についても同様に、江戸時代から現代まで、それぞれの時代に川の利用方法が変化していったので、その様子を恵那市史等から抜粋して報告する。

i 江戸時代

江戸時代に入ると戦国時代は終了し、250年間の長い平和な時代になっていった。この平和な時代での水の利用、特に灌漑技術が進歩し、用水の確立、溜池での水確保など、それ以前の時代にはない程急激にすすんでいった。この地方も尾張藩の藩領と岩村藩、苗木藩の支配を受け、戦のない時代へと入っていった。

この大井村は近世中仙道と大井宿から名古屋に通じる下街道の宿場町として美濃の中仙道で最も栄えた宿場町として賑わい、その賑わいは江戸時代250年間通してあったようである。「慶長郷帳」では高510石余で、幕府領から元和元年(1615)尾張領となり、田方401石余、畑方110石余新開石361石余とある。「寛政年間(1789～1801)の「濃州旬行記」では「家数250人数1030馬32枝郷岡沢は大井宿の東の寺坂に上がった所があり、牛馬荷物が多く往来し、諸商繁盛と記される。また、小百姓たちのうち馬追いなど現金収入に目を向ける者も出てきた」とある。また、明治5年(1872)の各村明細帳での一部に「耕地斜面が多く、諸河川や谷川の水を灌漑用水とした。阿木川の三郷用水や明和9年(1772)に完成した東野村の山本用水、佐々木村の深瀬用水は大型の用水であった。また、丘陵や山間に多くの溜池を築造している。」とある。江戸時代に入るとこの地方でも各地で川を利用した用水が記録に残っており、川からの用水が一つの村のみでなく、多くの村々と共同した灌漑が行われるようになった。また、別の記録で、大井村の用水として小時路川用水、道昌田井水の記述があり、阿木川の用水の権利が複雑になっていたと考えられる。次に、大井村に関係した用水について下記に記述する。

●三郷用水—阿木川流域の大井村、中野村、正家村が正家村地域の阿木川に立合井堰を築き、堰溜めた水を樋や井溝で導入する共同の井水を持っている。起源は不詳であるが、三か村の村役人により井普請、分水、井領米等が決められて、用水管理がされており、近世的な用水である。三か村が協力して共同用水を設置したので、三郷井水と称して用水管理をしていた。共同の井堰普請費や井領米を1200石で割賦していることから灌漑面積はそれに相当する100～110町歩と考えられる。当時の三か村の水田面積は大井村60町4反、中野村32町3反、正家村38町5反の合計131町2反歩であり、三郷井水はその地域の大半を灌漑していたと言えよう。

●山本用水—東野字山本にて、阿木川より取水し、延長約5400メートルの用水で、取水口付近標

高320メートル、河鹿橋付近標高250メートルである。用水が開発されたのは、明和9年(1772)である。当時すでに阿木川西岸には三郷用水(第一水利権者)があった。東野村と大井村は一緒になって三郷用水側に願って阿木川より新用水を引くことが認められた。その条件として、「①三郷用水は取水口を三町8間上流へ上げる。②この工事費は大井村東野村にて負担し、その後7年間損得所修理する。」であった。寛政4年(1792)この年より、数年前から東野宮の前付近の通水が悪くなり、大井村関係者はあまり利用していなかったが、この年より再び通水を始める。

●小路川用水—正家村の下流に位置する大井村の上流に堰を設け、三郷用水、山本用水の余り水を取水している。天明7年(1787)で大井宿にて大火があり、その消火として大きな力との記録があり、この時期に、既にこの用水があった。

●道昌田井水—用水名のみで、詳細の記録はなく、小さな用水であったと思われる。

以上、江戸時代の阿木川の用水は水利権の強いものが上流に堰を設け、その弱いものは下流の用水でその余り水を利用していた。これらの他にその支流での用水や山間での溜池での用水によって灌漑用水をめぐらし、耕地を増大していった。また、この用水は灌漑用水のみでなく、水車などの水力利用と、生活用水としても用いられたと思われるが、それらの記録はなく、推定にすぎない。

他に、当時の川の利用として、木材の輸送にも用いられた。恵那市史によると、阿木川の上流には岩村藩の城があり、その岩村藩では時々藩木材の立ち木を伐出して川下げし、売却して藩収入をあげていた。享保10年(1812)岩村藩領阿木村を御林の伐出し、阿木川を狩下げ(木材を川の水で下流に運ぶこと)している。また、文化9年(1812)岩村の御城山からが木材が伐出され、阿木川を狩下げしている。天保7年(1836)岩村から桧木材が伐出し、やはり阿木川を狩下げしている。こうした狩下げの際、川岸の田畑が踏み荒らされたり、堰が破損したりするので、阿木川岸の正家村や大井村から苦情が出され、損害手当金の要求が出されている。なお、阿木川を狩下げする場合、大井村で留木・揚木することもあったし、木曽川まで小狩(木曽川支流の川で木材を流し運ぶこと)して、木曽川でまとめられ大狩(木曽川など大河で木材を流して運ぶこと)して下流に運ばれた。

また、この阿木川は今より水量が多かったか、中山道の中でも大きな川の一つに数えられ、ここにかかる橋を大井橋とか中島橋ともいった。この大井橋は古くは川の中ほどに中島を築き、それを中継点として二つの橋をかけていた。島は川に沿って長く、下流部を平坦に、上流部を尖らせた舟形であった。長い方を大橋、短い橋を小橋とも言い、全体を中島橋といった。この橋がいつごろどのように架けられたかは不明である。文化2年(1805)に出版された木曽名所図絵の大井橋は中島橋でなくなくなり、板橋で欄干つきである。ほかの川の利用としては、本流の阿木川よりも人々の近くに流れている用水の方が生活水としては利用し易かったと思われるが、その記録がなく、残念である。

ii. 明治時代

江戸時代の鎖国時代が過ぎ、明治時代になると西洋の諸技術や諸産業が入り、水の利用も江戸時代とは変化し、西洋の産業、技術の進歩に伴って、変化していった。

明治4年この地方は岐阜県に属し、大井村に恵那郡役所が設置された。同5年の村明細帳によると大井村は家数273人数1026馬88旅籠27大工6酒造3味噌2左官石工質屋医師各1名いた。江戸時

代と同様に中山道の宿場町として栄えていたが、明治35年に中央線が中津川まで開通すると同年大井駅が設けられ、同39年には大井駅から岩村まで電車が通じ、同42年むには木曾川に東雲橋が架かり、恵那郡北部にも木曾川の渡しを利用しなくても通じ、交通の中心地として大井駅周辺が発展していった。一方、農業では、蚕種業が盛んになり、菜種も栽培され、三椏や楮を植え、それを原料として紙も生産した。また、同23年大井村から町制を施行し、大井町となった。一方、耕地用の用水は江戸時代の管理方法が引き継がれ、依然昔のまま各村で管理されたが、用水自体は改良された。その様子と当時の用水管理について下記に示す。

●三郷用水一山本用水の開削のため、山本用水取入堰の上流に移動することとし、木堰石並べ式で取水したが、洪水により流失し河床低下により、明治36年(1903)、県土木補助工事で石堰用水路急破工事(災害)として、更に30メートル上流に移動し、完成した。(それまで何回も流失している)このときの受益面積は71.8ha、受戸数350戸、水車13で、受益面積は前述に示した江戸時代の推定の100～110町歩より少なくなっているようである。

●山本用水一明治6年、河川の大小区制となり東野、大井、正家、中野共に第5区小1区となり、大井村から同一の区となり、用水の請負費用はなくなるとの主張した。明治15年の洪水には、山本用水の井堰流出し、その再建にあたり、三郷用水側が明和7年以前の場所に取水口にすることを主張し、山本用水側はこれに反対し、裁判となるが、翌16年和談が成立した。明治35年、同36年三郷用水、山本用水の堰が共に流失し、山本用水を108間上流に取口を移し、三郷用水は2尺掘り下げた。尚、大井側はこの用水をあまり用いなかったようである。

以上、明治時代でもこの用水はこの地の大切な用水であった。同様に、小路川用水も阿木川東岸の低部地帯の用水として大切に用いられていた。

尚、上述の三郷用水に水車が13あったとの記録があり、実際、人々と用水とは今以上に密接な関係があり、動力として、生活用水として用いられていたことが想像出来る。本流の阿木川では川が大きく、動力や生活用水としては使用出来難かったと思われる。

iii. 大正時代

大正時代に入ると本格的に西洋文化が浸透し、工業や産業も本格的に稼動する時代になっていった。この頃になると、発電として本格的に水力を用いるようになり、灌漑も近代的な設備で行われるようになった。

大井町は大正時代になると、更に駅前を中心に南部に拡大し、その中心地の一つの新町も狭い場所に家々が多く並ぶようになった。この新町ではこの時代に度々火災を起こしたが、阿木川は深く下に流れており、消火には役立たず、放火用として、新たに新町水路を新設することとなった。大正14年、阿木川正家1丁目より新町用水として大井町新町へ導入して新町用水として完成した。

一方、用水として、今までの盆地の低地の灌漑から高地の丘陵地帯の耕地を灌漑する用水が作られている。それが東野村の保古用水計画である。大正8年(1919)頃計画を立て、同10年に保古山の高原地に保古の湖を完成し、田97ヘクタール、畑10ヘクタールを耕地として開墾した。その保古の湖は満水面積12町歩、最大水深16メートル、貯蔵量758,000立方メートルであった。

また、この時代の新たな川の利用としては発電がある。この阿木川でも水力発電が検討され、実施された。大正2年「水力発電用水路新設」の申請を岐阜県知事に提出し、恵那郡大井町字横地の阿木川に堰と取水口を設け、毎秒28立方尺を限度に水を取り、水路で下流の同町字奥戸地内に導入し、ここで発電所を建設しようとする計画書で、その許可条件として、「①水の使用許可期間は、大正3年～大正23年の20ヵ年、②6ヶ月以内に工事をし、1ヵ年以内に工事完了、③阿木川における木材の川下げや魚類の棲息に差支えないように川の浚渫を行い、必要な場合には河水の集注流下の出来る設備を設けること、④流水引入口には制水門木材流入防止設備、量、水槽(水路中の適当の場所でもよい)を設置すること、水路中の諸所に排水口を設け、定量外の水を排除する施設を設けること、⑤その他」とあった。大正8年3月～10月に施工、取水堰堤は大井町横平に設け延長16間(約30メートル)途中で幅5尺の木材貫流所、幅4尺の魚道を設け、ここから阿木川東岸に沿って、途中濁川を跨ぎ、この水も摂取して大井町奥戸に達する1754メートル有効落差30.7メートル使用水量2,085立方メートル秒の水路を引いた。その水で水車を回転させ、500キロワット1台発電機は590キロボルトアンペアー、当初の許可出力の450キロワットを発電した。この電力は大井町に送電され、その当初の受電は電燈引戸数は669戸で、点灯数は984灯であった。また、阿木川の支流の小野川でも小型の水力発電が行われ、直流1キロワット時で小野川地域12軒に送電した。尚、本格的な発電は大正13年木曾川で施工された日本最初のダム式発電の大井発電所である。

iv. 昭和時代

昭和時代に入ると戦争一色となり、人々は耐久の時を過ごすことになる。戦争に敗北し、アメリカから民主主義が入り、昭和30年以降急激に工業化が進むと共に河川の状況も急激に変化し、工業排水を河川に流し、公害を発生させたりした。

この大井町は昭和元年木曾川に笠置村へ通じる笠置橋が架かり、既に架かった蛭川村へ通じる東雲橋と共に、近郷への定期バスが走り、大井駅は交通の要所となる。昭和48年国道19号の恵那バイパス、同50年中央高速自動車道の開通で、中部経済圏との結び付きをいっそう容易にした。また、第二次世界大戦後は工業の発展がめざましく、パルプ、紙、紙加工製造をはじめ精密機械、非鉄金属、食料品、金属、窯業、土石製品、木材、木製品などの製造業を中心に発展した。

用水では江戸時代から用いられている三郷用水、山本用水もそれぞれ改築され、大正時代の保古用水も能力アップし、更に、昭和に入ると恵那中部用水、阿木川ダム設立と広域の水管理が行われるようもなった。一方、工業、特に製紙工業の発展は、一時阿木川を廃水の水路として利用し、阿木川の大井町側は生物が棲育できないほど環境を悪化させた。まず初めに各用水での状況について下記に示す。

●三郷用水—昭和2年大井長島東野各町村長連名により申請して、昭和3年取水堰堤及び水口を現在のものとし、今までの330戸で、団体営灌漑排水事業を施行し、延長3,688メートルとして、山林原野の開発を進め、昭和27年には受益面積130ヘクタールとした。取水については、対岸の山本用水との間で激し紛争が生じたが、三郷用水は山本用水より取水歴が古く、優先するも、堰は木堰または石

俵と固定堰は出来ないことに決まっていた。また、昭和2年、両用水総代の覚書が交換され、阿木川の余水のあるときは三郷用水80%山本用水20%の割合とし、現在に至っている。昭和42年に建設省により本堰堤上流に東濃5市1町の各種用水の補給として、阿木川ダム建設計画が樹立され、昭和53年に水源地域に係る整備許可が樹立され、その一環事業として本取入口が改修された。

●山本用水—昭和5年大井町は毎年夏季、もっとも給水至難なる市場田用水の灌漑万全のため、係員を置いた。昭和38年、山本用水を完全に整備し、阿木川東部の農業用水、防火用水を確保するため、整備、着工され、昭和44年完成した。そのお陰で、灌漑面積は117ヘクタール(水田10ヘクタール)米増産190石増加し、その後阿木川ダム付帯工事で改修された。

●保古用水—昭和10年水路延長5500メートル、約1800メートルは谷川を利用し、約3300メートルの導水路が完成し、開墾地97町歩、地目変更によるもの10町歩合計107町歩増加した。更に、昭和26年(1950)から昭和32年に掛けて堰堤嵩上げを行い貯水量増加し、新設の根の上湖分と共に隣の中津川市の茄子川開拓に通水して、新規の152ヘクタールの開田開畑を開墾した。

●恵那中部用水—戦争直後、恵那市長島、三郷、武並町にまたがる面積288.6ヘクタールの丘陵台地を開拓し、主として農家の零細化防止のために2.3男対策として入植増反389戸を対象に実施したもので、昭和23・24年開拓が実施されたが、水の便が悪く、すべてが開畑であったため、生産性が低かった。そのため、開田を希望する声が高まり、他の水源を求めて、開田する計画が検討された。その水源を阿木川支流の小野川谷に求め、その川を堰き止めて溜池を造り、開拓地に通水し、併せて、周辺の森林原野を開田して、入植農家の経営安定と既農家の経営拡大を図ることが考えられた。昭和31年に着工し、昭和43年と実に13年間かけて完成した。1号用水路は野井、2号用水路は長島町永田、3・4号用水路は三郷、野井、佐々木、武並町竹折へと旧恵那市の南部地域の広域の丘陵に水が引かれた。

●阿木川ダム—阿木川ダムは平成3年ロックフィル式ダムとして建設されました(その規模は前述の阿木川全容と歴史参考)。阿木川ダムは東濃地区、愛知用水地区に飲料水、工業用水を送るだけでなく、下流の川の流れる水を調節することにより、洪水や水不足を防ぐなど色々な目的で利用されています。また、放水時に水力発電をしてダムでの使用の電力を賄っている。

以上、阿木川は海拔1300メートルから230mまでの落差があり、用水の技術が進歩する毎に、少々小高い丘陵地でも灌漑用水を引くことが可能となり、事実、時代と共に盆地の低地の用水から、次第に丘陵地帯へと用水が引かれ、更には、恵那市のみでなく他の地域にも用水が可能となり、現在では阿木川ダムの如く、東濃地域から愛知用水へと受益の範囲が広がっている。その為には、阿木川の水質が改良する必要があるが生じ、工業排水の処理と共に生活水の浄化のための下水道の施設が次第に広がっている。しかし、全面的な下水道は今後に待たなければならない。また、新しい利用として水力発電があり、現在でも中流の阿木川ダムと下流の奥戸で発電している。

里川と考えられるのは阿木川ダムのような大規模の用水利用や発電施設ではなく、本流の阿木川からの用水として流れている三郷用水や山本用水、小路川用水及び新町用水のように町の真中や部落に流れている用水が最も里川として考えられる。現在では残念ながら里川として考えられる面影はなく、これらは用水と人々との関係が大切になるように思われる。

参考資料

わたしたちの恵那市 社会科副読本 平成 4 年 3 月 31 日 編集 恵那市社会科資料所委員会
発行 恵那市教育委員会

恵那市史 通史編 第 2 巻 平成 3 年 3 月 31 日 編纂 恵那市史編纂委員会
発行 恵那市

恵那市史 通史編 第 3 巻上 平成 5 年 1 月 25 日 発行と編纂 同上

日本歴史地名大系 第 21 巻 岐阜県の地名 1989 年 編集 平凡社地方資料センター
発行所 平凡社

5 子供達の川への興味の変化

1 から 4 までは、私の故郷にある阿木川と人々との関係を中心に調査し、紹介をして来ましたが、意外にも、この阿木川は、自然的にも、人口的にも、私が考えた以上に色々な面で変化があり、人々の間でも多くの関係を持っていることを知りました。また、時代毎に、川が人々の生活に重要な役目を成している事が判り、非常に驚いている処です。しかし、この本題である「里川」として大切なのは、「人々と川との直接的な関係、特に肌で触る関係」と思われるが、その記録について、残念ながら恵那市史や他の資料でも皆無の状況である。まして、「子供達の川への興味」の記録はない。そこで、「3 の昭和20年代での大井町の人々の生活」での川の利用と「4の昭和20年代での阿木川を水源として用水」の利用を思い出し、そこで行われていた大人達と川との関係を、ひいては、子供達が川へ如何に興味を持ち、実際に、如何にして川を肌で感じていったかを調べて見たいと思っている。その事が、私達が考えている「里川」についての一つの答えではないかと考え、下記にそれらの事を判る範囲で記述してみた。

i 大人たちの川の利用

イ 昭和20年代での大井町栄町(街内)に住む人々の川の利用

この時代の大井町栄町は、前述の如く、床屋、新聞屋、肥糧屋、和菓子屋、製麺所、鍛冶屋、染物屋、洋服仕立屋、ブリキ加工屋、飲食店、三味線の師匠、芸者置き場など多種の職業を持った人々の集まりで、それぞれが個人的に個々で事業をしていた。この街には、街内の東側に 4~7 メートルの下を流れている阿木川と、防火用水としての小さな新町用水とがある。また、この時代では、この街には水道がまだ引かれず、街の人々は井水と川の水とを有効に利用して生活をしていた時代でした。

新町用水は、正家から永田川に流れる幅30センチメートル殆深さ10センチメートル前後の小さい狭い用水である(現在でも流れている)。この用水は街中にある密集した家々に沿って狭い場所を曲がりくねりながら流れ、主に、防火用水として利用されていた。その他の利用としては、下水道が出来るまでは、風呂水や調理後などの生活排水と雨水の排水構として利用していたが、現在では水道と下水道が街中で整備され、防火用水や排水構の役目はなくなり、雨水の排水のみの役目になった。また、一部では小さな池の水としても利用していたが、水量が少なく、狭い用水であったので、他の用水のような多岐に渡る利用はなかったようである。

一方、阿木川については、この街の人々が仕事の面で良く利用していた。私が子供の頃、学校帰りに川が色々な方法で利用していたのを見ており、その経験を述べの事にする。まず、その一つは料理屋での魚の養殖であった。養殖と言うよりも、「うなぎ、ドジョウ、鯉」の料理用として魚を生かして保存する「イケス」の代わりとして使用していた。竹で編んだ直径1メートルから 1.5 メートル程の丸い籠(ビッグ)にウナギやドジョウ、時には鯉を入れ、一週間から二週間ほど川の中に入れ、生かしておいて、泥臭さを抜き、必要に応じて取り出し料理していた。時々、籠から魚に逃げる場合もあつようで、それはそれでよしとしていたようであった。この時代では、それらのビッグから魚を奪い取ろうとする者はいなく、そこに籠があるのが、ごく自然で、当たり前の事の状態であったと思われる。子供達にも「うなぎ」や「鯉」は羨む魚であったに違いないが、そこから取り出そうとする考えは全然なく、魚を大切な物として見ていた。また、染物屋では、家から川に降りる長さ 4 メートル程の長い橋を備え付けており、この梯子から降りて、阿木

川に入り、神ノ木橋付近の浅い流れの強い所に竿を流れと直角に置き、染め後の布をその竿に掛け、洗っていた。これは、布を染色したとき、染色止めに使用した糊を洗い落すのが目的で、学校からの帰りに、橋の上から良く眺めた風景である。特に、色々な家紋のついた藍染の染布を洗っていたのが印象的に残っている。一方、菓子屋や製麺所では、作業所の場所確保するために、川に張り出した木板製の踊り場を設け、その下にある石を金網で縛った川岸へ降りるための梯子を備え、この川岸に降りて、菓子製造やうどん製造に使用した箱、長い木製の棒などの道具、バラバラにした機械を川の水で予備洗浄していた。予備洗浄した物は踊り場まで持ち上げ、井戸水で仕上げ洗浄していたようである。他街の漬物屋もこの阿木川を使用していた。その漬物屋さんは、川を小石で堰き止めて一箇所に流れを集中し、菊牛蒡(山牛蒡で、牛蒡を斜めに切ると、その表面が菊に見え、そこで、恵那の方ではこの山牛蒡を菊牛蒡と言ひ、現在でもその名前を使っている)を小型の金網で造られた水車で予備洗浄していた。その水車は、直径約 1 メーターの六角形をした木板を両面に有し、その角度のある先の六ヶ所の部分に約 1 メーター程度の長さの四角い木を両側の板の棧に取り付け、その棧に粗い金網を貼り、その棧には水車状の羽根板を取り付けたもので、その水車の中に菊牛蒡を入れ、川の流れで回転しながら洗浄し、土や砂を除去していた。その予備洗浄した菊牛蒡は、店へ運び、井戸水で再洗浄していたと思われる。この様に、大人たちは川を大切にし、その川を生活の一つの必需品としていたのを子供達が常に見ていると、彼らも川をきれいに保つ必要性を感じ、川を身近に感じていたと思われる。

漁業関係では、阿木川にも漁業組合があり、5月初旬に、琵琶湖産のアユを放流し、6 月からアユを解禁して、鑑札を手にした大人の人達がアユ釣り饗していたが、子供達は、阿木川本流ではアユを釣るつもりがなくても、シラハエやモロコなどを釣る事が出来ず、不満を感じていた事が思いだされる。10月頃になるとアユ釣りも終わり、その頃から真冬にかけて、大人達もこの川でシラハエなどを投網で取っていた。当然、食糧として使ったと思われるが、これを生活の糧にしていたかは定かではない。当然、川の利用には何らかの約束やルールがあったと思われるが、定かでない。

また、風習としても面白い興味深い行事が行われていた。「お盆(この地方では1ヶ月前の7月14・15・16日に行われている)の時、亡くなった霊を迎えるには桐の葉が用いられた。お墓参りの帰りに、桐の葉を取り、その葉の上に霊が乗せ、家に持ち帰り、家に霊を迎え入れた。お盆が終わり、霊を墓へ送り出す時にはナスの牛とキュウリの馬に乗って阿木川を下って元の墓に帰らせた。その時、食糧として、大豆の葉に米、塩、味噌などを包み、それぞれのその牛や馬に乗せ、橋の欄干から阿木川に流し、その橋の欄干の下には線香を焚き、その煙をたなびかせた」。

以上、上記の如く、この頃には、この阿木川は人々の生活には大切な川であり、子供達にとっても、大切な川としてのイメージが大きかったに違いない。しかし、残念なことに、昭和 20 年代後半になると、阿木川の下流の上部(大井町の上流、各用水の取水口よりは下流)に恵那の山々の木々を原料としたパルプ工場が出来ると、川が一変した。それは、パルプ製造時に生じた汚い排水を直接阿木川に流したからである。そのために、この川の浄化能力以上の有機物が放流され、その下流の川は完全に死の川になってしまい、悪臭が町を被ってしまった。子供ながらも、こんな汚い物を何故川に流す事が出来るのか、不満を越して怒りを覚えたことを思い出される。大人たちは如何に感じ、それを許可していたのであろうか。川を利用していた多くの人々は、きれいな川であったから使用出来たはずであったが、使

用できなければかなり不便を感じたであろうと思われるのに。

現在までで、大人たちが身近に川の水を利用しなくなった原因として、大きく分けると下記の三つになると考えている。

- ① 河川の汚染により、川の水の質が悪変した。
- ② 企業の発展に伴って、個人経営による仕事の減少により、川の利用がなくなっていった。
- ③ 水道や工業用水の完備により、川の水の利用をしなくても良くなった。

その内、この阿木川と人々との関係を遠ざけたのは、最悪の河川の汚染であった。そこで、子供達は、川との関係をパルプ工場より上流の阿木川まで求める事になっていた。

ロ 昭和20年代からの用水付近での人々と水との関係について

この大井町には、現在でも三郷用水、山本用水、小路川用水、新町用水の4本の用水が町内中を縦横に流れ、灌漑用水や一部では防火用水としても利用されていたが、その他に、水車の動力、農具や野菜など洗浄及び鯉の養殖などとして利用し、使用されていた。しかし、現在では、殆どが水田用の灌漑用としのみ利用されているに過ぎないのは残念である。

では、昔は如何にして用水を利用していたであろうか。まず初めに、これに関する記録について調べてみる。恵那市史によれば、三郷用水では「昭和の初期には、非常にきれいな水が流れおり、子供達が魚を掬って楽しんだ」との記述があり、また、明治時代、三郷用水には、前述の如く「水車が13台あった」との記録があるが、それ以外には顕著な記述がない。また、他の資料(恵那市の自然・わたしたちの恵那市・日本歴史地名大系 岐阜県・中山道美濃宿)についても用水に関する色々な利用についての記述は皆無の状況である。そこで、実際には、如何にして用水の水を利用していたか、昭和20年代、私が子供の頃に用水や用水から田に引かれた小溝で、魚掬いや芹を取った経験があり、肌で感じ取った小路川用水での利用について思い出してみよう。

この小路川用水は、阿木川下流の上の方(大井町の最上流で、パルプ工場の排水溝の上流)の海拔約290メートルに堰を構え、取水口を設け、阿木川の東岸直ぐの田園を灌漑用水として流れ、その東岸の街並(旧中山道の宿場町)の防火用用水として南北に通過し、更に、川下の田園地を灌漑用用水として、河岸段丘の裾に沿って流れ、その後、その河岸段丘から離れて、その地域の高所を通り抜け、最後には阿木川下流の峡谷の上流海拔約260メートルに流れ落ちている。夏には源氏蛍が飛び交った用水で、川幅は1メートルから1.5メートル前後で、深さは1メートル程の用水で、昭和20年頃には既にコンクリート製の溝であった。その用水には、通常その1/3程の水位があり、割に多くの水が流れていたが、稲作の時期には、用水の下流は数センチメートル程の浅い水位になる場合もあった。雨が少ない年には、下流の農家の人々は、当番制で、用水と阿木川との距離の最も狭い場所で、直接阿木川からポンプで水を吸い上げ、用水の水の補給をしていた事があった。しかし、阿木川が汚染されてからは、それも行われなくなった。その為、時には水不足もあったと聞いている。

この用水も、前述の如く、取水口から本流に流れ落ちるまで、落差が約20メートルあり、その落差を利用して水車が各所に見られた。私が知っているこの用水の下流地域でも水車が2ヶ所あった。その一つは小型で、もう一つは3連繋がっているの水車を構えた大型の水車であった。前者の水車は、一つの搗

き器を備えたのみの小さいもので、この付近の農家が、精米や粉挽きに用いていたようである。もう一つは、本格的な水車を設け、多数の搗き器を一行に並べ、精米、粉挽きと、付近の農家の他に町の人々にも商いをしていた。現在もその建物だけは残っているが、殆ど壊れそうである。今でも、どちらも、その場所は坂になっており、その雰囲気は何えられる。水車を設置するには、誰でも出来るわけではなく、ある種の特権か、それなりの金額を用水組合に納めていたに違いないが、その詳細は不明である。また、この用水の利用の一つとしては、街の防火用水であったが、その街中での用水は、家々の間を家に近くを流れおり、一部では生活用水として利用された可能性があるが、それについては、残念ながら定かではない。

また、この用水のもう一つの用途としては、各種の洗浄用水として利用であった。その一つとしては、前に述べた如く、水車形の洗浄器での利用である。学校帰りに、前述の菊牛蒡を洗ったと同じ洗浄器をこの運河に設置し、新ジャガイモの皮剥きなどに利用していたのを覚えている。また、この用水の下流域は、戦前まで小作をしていた人々が多く住み、生活がそれほど恵まれていなかった関係か、この用水を一般生活の水として色々利用していた。まず、茅葺屋根の住居の殆どが用水の間じかに構え、その用水の所々にはコンクリート製の階段が設けてあり、その階段の下に大人一人が座れる程度の広さがあり、そこで、食器や野菜の予備洗浄及び衣類の洗濯などに利用していた。飲料としては、井戸水が豊富でここから直接汲んでいた。尚、作業の済んだ泥つきの鎌や備中などの農具、畑から直接取れた泥が付いている野菜の洗浄の多く、及びオムツなど下の関係での衣服の洗浄には、用水から水田のために引いた小溝で行っていた。これは、この用水がこの地域では高所に流れているために、水が汚染され易い状況であったからと想像される。そこで、これを防止するのに、この地の人々は生活の知恵として用水の水を汚染から守る習慣を過去から引き継いで守っていたと思われる。また、書物によれば、この時代の農家の人々は大小便では勿論の事、風呂水、生活の排水を肥壺に一旦ため、畑などの水として使用していたが、この地方の人々には大小便の肥壺はあったものの、その他の生活排水を溜める風習はなかったと思われる。これは生活用水の多くをこの用水を利用し、そのまま用水の小溝に排水として流していたと思われる。勿論、肥壺にある大小便は発酵させて、大切な肥糧として、畑に撒いた。

他の利用として、池や水田での魚を養殖があった。前者は現在でも一部で行われているが、後者はこの時代の風景で、5月の田植えのときに水田に幼鯉を放し、養殖していたのを見た事がある。これは、水田の水を抜く9月まで、この水田で鯉を養殖し、少し大きくなった鯉を売っていたようである。しかし、しばしば、小溝に幼鯉が泳いでいるのを見ると旨くはいっていないようにも思われた。

しかし、この地域の人々も、長男が兼業農家になり、その他の子供達も大阪、名古屋に住込みで働くようになると、生活が豊かになり、また、衛生的にも芳しくない事から、行政からの指導により、上水道の導入がなされ、この用水を生活用水として利用する事は少なくなった。また、井戸水の利用も水道の利用へと移行した。また、水車も農協での電気モーターによる精米や製粉が出来るようになると、水車の利用も減少し、この用水の利用は灌漑用と鯉の養殖のみとなり、それ以外の利用は、殆どなくなっていった。このような状況になると、大人たちのこの用水での触れ合いは減少し、次第に用水から遠ざかっていった。

ii 子供達の川への興味の変遷

イ 子供達の川への感情

1で述べた如く、昭和20年代の子供達の川や用水に対する感情は、大人達が生活の大切な道具の一つとしての川や用水の利用を見て、一種の神聖な領域と感じ取り、その大切さを肌を感じていたようである。実際、子供達は、栄町に流れている阿木川の流には、大人達の大切な仕事場と考え、子供の立ち入る場所ではないと考えており、ましてや、遊び場とは考え難かった。そこで、子供達は川の遊び場を栄町や他の町での大人達の仕事場とは関係のない川下に求め、水遊び場、水泳場とした。また、この頃の子供達は、前述の如く、現在の子供のような遊び道具やテレビを見る事もなく、彼ら達で、グループを組んで、自分達での遊び場を求め、街の広場や岡、川を飛び廻り、自然をそのまま有効に利用して遊んだ。特に、川や用水及び溜池では、子供達にとって、春から秋にかけての魚釣りや魚捌い、夏の水遊びや水泳、冬のスケートなどの大切な遊び場でもあり、不思議な体験の出来る場所でもあった。

その後、この阿木川の汚染が進むにつれて、大人たちは、川での仕事場を失い、阿木川に対する感心が薄れ、台風、大雨などの洪水で被害が出ないかと心配するマイナスの興味しか示さなくなっていた。このような状況でも、子供達はこの川に対しての愛着をもっていた。まだ、その頃は、遊び場が少なく、川を忘れ切る事が出来なかったようである。子供達は、汚染の少ないあのパルプ工場の排水の上流やこの阿木川の支流にその場を求め、魚捌いや魚釣り、水泳を楽しんでいた。また、この頃になると、川の汚染により、漁業組合によるアユの放流が出来なくなり、大人達の漁獲の特権もなくなった。逆にその面では子供達にとって良い環境になった。しかし、学校にプールの施設が完成すると、「川や溜池は危険で近づかないように」と言うことで、学校や大人から川での水遊びや水泳が禁止され、その川の感心が薄らいでいった。でも、尚、子供達は阿木川の支流や溜池で水遊びや魚釣り、用水や用水から引いた小溝での魚捌いは楽しんでおり、まだ、水を肌で感じていた。それがなくなるのは、子供達の遊び方が野外の遊びから家庭内の遊びへと変化し、それに伴って、川や用水、溜池からは遠ざかり、それらに対する遊び場としての興味は完全に薄らいでいったからである。また、用水の廻りにも家々が立ち並び、道路を広げるために、用水の多くは暗渠になり、用水からの小溝もその建物の生活用水の排水場所となり、子供達の遊び場としての利用は出来難くなった。

現在では、この阿木川に阿木川ダムが完成し、その下流では川幅が広くなり、堤防には人々が散歩出来るような小道が整理され、魚類や鳥類も多く帰って来た。また、用水やそれから流れる小溝も、下水処理が整理され、水質も改善されてきたが、それでも、子供達が昔のように川や用水、溜池に興味を注がなくなったのは非常に残念である。

ロ 昭和20年代頃からの子供達の川、用水、溜池での遊び

昭和20年頃の川の水遊びには前述の如く、魚釣りや魚捕りの他に水遊び、水泳、スケートの他に川岸に生える植物の採取などがあった。その子供達の遊びには自然に

- 大人の仕事場には入らない。
- 小学校の地域内で遊ぶ。
- 上級生の言うことを良く聴く事。

のようなルールが出来て、それを守りながら、下記の遊びに興じていた。

この昭和20年代前半は、阿木川はまだ水がきれいで、春から秋にかけて、川の好きな子供達は二三人で魚釣りに興じ、フナ、ハエ(オイカワの幼魚)、モロコ(カワムツ)を釣り、家に持ち帰ってお母さんに醤油で味を付けて煮て貰い、それを旨く食べた。また、小石を川に並べ、一箇所出口を設け、そこに網か竹製の籠を置いて、上流から足や手で小石を動かしたりして五六人で魚を追い、砂地に居るザッコ(カジカ)、カワドジョウ(シマドジョウ)、ドウセン(ヨシノボリ)などを一望打尽に捕えたり、また、川の一部を完全に塞ぎ止め、中の水を全部出し、その中に居るフナ、ウナギ、ハエ、モロコなどの魚を手掴みで捕った、魚の棲みそうな比較的大きな石が積み重なっている場所の一番上の石に大きな石を上から強く振り落とし、岩の中の魚を麻痺させ、その岩を取り除いて魚を取った。また、上級生では大人の真似をして、大きめの釣り針に大きめのミズを指し、短い竹に縛り、ウナギの居そうな川原に刺しておき、翌日、その竹を回収した。用水での魚釣りや魚掬いを行っているのを余り見た経験はないが、実際は行われていたに違いない。それよりも用水から水田に引かれていた小溝では、魚を掬ったりして楽しんだ事を良く覚えている。本格的に釣りを行う者はこの川の支流を歩き廻りながらモロコやハエを釣っていた。溜池では、子供達でも良く釣れるモロコやフナを釣って楽しんだ。

川でのもう一つの遊びとしては川の水遊びである。昭和20年前半の水遊びや水泳は、栄町や他の町の下流にある阿木川の比較的大きな淵のある所を選んだ。その一つが中央線の鉄橋下の淵で、他に、その下流にある大石がある淵を遊び場にした。でも、そのままでは、遊ぶには水位が足りず、子供達全員で川幅全体に石を並べて堰を作り、水位を確保した。そして、その場で町内の小学校の上級生から幼稚園までの子供が一団となって遊んだ。ある者は鉄橋や大石に上がり、足から淵へ飛び込み、また、ある者は潜ってヤスで魚を捕ったりし、泳げない児童は、浅瀬で遊んでいた。当然、この頃には、水泳教室などはなく、上級生の泳ぎを見て覚え、時には上級生達が児童に泳ぎを教えたものである。泳げない者は布で作った手製の浮き袋(布を長方形に縫い合わせ、布目から口で空気を入れた物)または板切れを使い、泳ぎの練習をした。また、時々大水があるとその遊び場が砂で埋まり使えなくなったりした。その時は、上級生達は、その川の他の場所での深場を探し求めて、石を積んで水泳場を確保した。

しかし、この阿木川が汚染されると、今までの下流では泳げなくなり、また、その支流では適当な水泳場はなく、大井町の殆どの子供達は、パルプ工場の上流に子供達が作った水泳場へ足を運んだ。更に、その上流は正家となり、大井町の子供達での遊び場の範囲ではなくなり、そこへは遊びに行かなかった。そのため、大井町全体の子供達はこの水泳場に集まり、狭い場所で賑やかに水遊びや水泳をした。しかし、前述の如く、学校にプールが出来ると川での水泳が禁止され、子供達は川へはいかなくなった。でも、最近岐阜県恵那市明智町で、小学生の女の子が水着を着て川遊びをしているのを見て、まだその風習が山奥では残っており、懐かしく眺めた。

冬になると、当時は現在より寒さが厳しく、恵那峡の大井ダムも氷結し、スケートが出来るほどで、この阿木川でも、流れのない日陰の部分では厚く氷が張り、そこでは下駄の底にスケートを取り付けた下駄スケートを履き、スケートを楽しむ事が出来た。しかし、その場では多くの子供達や大人たちが滑るには危険であり、大勢で川の氷には乗る事が出来ず、次第に、使用しない日陰の水田に水を張り、その水を凍らせた臨時のスケート場を作り、スケートを楽しむようになった。また、そのスケートを買うことの出来

ない多くの子供達は、長靴を履き、それで氷の上に乗楽しんでいた。また、本格的にスケートをする学生や大人たちは、保古山の保古の湖まで登り、練習する者も出るようになった。しかし、気温が上昇し、温暖になると、その水田でのスケートが困難になり、そこでのスケートは衰退していった。

ハ. 現在の里川について

以上、大人たちは江戸時代から昭和の20年代にかけて川や用水を大切に利用し、川や用水に愛着を感じていたが、この阿木川においては、パルプ工場の稼働により、河川が極端に汚染し、その愛着も消滅した。用水においても、衛生面の指導や水道の導入により、その利用も極端に減少し、川や用水の感心が失われていった。一方、子供達は昭和20年代から30年代になっても、野外で遊ぶ事が多く、その遊び場の一つとして、川や用水や溜池を遊び場として求めた。この川などの利用も、学校でプールなどの設備の完備、遊び道具の多様化、塾を中心とした勉学への集中などにより減少し、加えて、子供達が集まって遊ぶとか、自然をそのまま利用する遊びなどに尻込みをし、自然から遠ざかってしまった。この状況下でも、川や用水を「里川」として求めるには、昔と同様に、大人たちも子供達も「川を如何にして肌で感じる事が出来るか」が最も必要な条件と考えられる。しかし、現在はこのような条件の里川を求めるのに困難な条件があり過ぎて、これら一つ一つを取り除かなければ里川は生まれえない。そこで、今後は、あいたらしい解釈での里川を考える必要があり、如何にして「川や用水を肌で感じる環境」を作り上げるかが大切であると感じている。

6 現代での人々と水との関係

現代での水の利用は、農業用水、工業用水、家庭用水、電力発電用水など多種多様に利用され、その量も過ってないほど多量に用いられるようになって来たが、最近の一般の人々での水に対する感心は、実際に、自分達が使用する家庭の水道水に感心がある程度で、その感心も、その水の利用金額やその水が旨いか不味かのである。まして、その他での水に対する興味は少なく、尚更、川や用水に対する感心は非常に乏しい状況になってきている。それ故、今、議題にしている「里川」は、今までにそれを如何に解釈し、理解が出来たかを十分考え直し、その付近に住む人々や仕事をしている人々に如何に広げて行くかである。そこで、私なりに「里川」について解釈しようと考え、下記の如く整理を試みた。

i 今までの里川の解釈

前述の如く、昭和20～40年頃以前の川や用水や溜池に対する人々の考え方とその密接な関係を述べ、「里川」としての解釈出来そうな事柄を引き出し、各時代での川や用水の利用方法を整理した。その整理の中から「里川」に関係のある精神的内容を求め、その内から、今後の考え方を検討してみた。

そこで、最初に、川や用水の利用の中で、「里川」として成り易い水の利用と成り難い水の利用とを分けてみた。

イ 里川として考え易い水の利用と難しい水の利用

残念ながら、阿木川に関する資料で、一部の時代では資料が少なく、全時代での川や用水に関する事項について詳細に述べる事は出来難いが、それらの中で整理してみと、支配者の水の利用と公共的な利用は里川としては考え難く、一方、生活と密接な関係のある川や用水が「里川」として考え易い。そこで、これらの内容を整理して、下記に「里川としてなりがたい水の利用」と「里川になりやすい水の利用」とに大別してみた。

○里川としてなりがたい水の利用

● 支配者での水の利用

- ・ 古墳時代の古墳周囲の濠
- ・ 戦国時代の城の堀
- ・ 木材の運搬としての川の利用

● 公共での利用

- ・ 塩の道としての利用
- ・ 大規模の農業用水としての灌漑設備など、
- ・ 工業用水などの設備
- ・ 水力発電などの設備
- ・ 大河の水運
- ・ 産業用の原料などの採取
- ・ 産業用の水車

などが考えられる

○ 里川になりやすい水の利用

● 民間での利用

- ・ 狩猟のための道としての利用
- ・ 漁猟としての利用
- ・ 集落や個人で利用する灌漑用水
- ・ 集落や個人で利用する水運
- ・ 集落や個人で利用する水車
- ・ 集落や個人で利用する生活用水

などが考えられる。

以上から「里川」は「川や用水が身近なものとして利用されている」と考え、その良い例を下記に述べてみる。

ロ 身近な川や用水の利用

上記の如く「里川として考え易い水」は、「川や用水での身近なものとしての利用」と考えた。そこで、その良い例があるかを書物から調べてみた処、「古代での川の間」と「生活用水の利用」についての内容を示している本を見出したので、それらについて下記に示す。

前者は、大和謙二著の「知っているようで知らない水の不思議」があり、[アイヌ人の川での感覚として、水は上流に向かって流れる]と言う自然観が記述してある。

その内容は「アイヌの人たちにとって、川は遡る場所であった。サケを捕り、山深く分け入ってシカやヒグマを追いかける場合でも、川は常に遡る場所でした。なかでも、サケはアイヌの人たちがもっとも大切に生きた生き物です。秋になると、群れをなして遡るサケは貴重な食糧であると同時に神聖な生き物であり、産卵のために必死に遡るサケはまるで川が逆流しているような錯覚さえ与えます」とあり、まさしく、この川の間は「里川」と考えられる。

また、後者での「生活用水の利用」としては、嘉田由紀子先生著の「水辺ぐらしの環境学—琵琶湖と世界の湖から」の中での「昭和 30 年頃での琵琶湖湖辺の部落に関する調査」の結果であり、その記述の一部を下記に示す。

その内容は{湖辺に立地する集落のうち、22%の集落が川水か湖水の表流水を直接飲み水に使ひ、風呂水だと30%あまり、洗濯になると半分以上の集落が表流水を利用していた。その表流水を飲み水にするためにはきわめて細やかなしきたりが地域の中にあつた。その一つの例として、湖西のマキノ町智内村にある集落の川の間をみてみよう。

朝早く、川から飲み水を汲むので、洗濯や洗ひ物はしない。洗濯は日が高くなってからする。しかし、下のモノやオムツは水を一旦タライに入にとつて、洗ひ水は排水貯留槽に溜めておく、台所からの排水も一旦排水貯留槽に溜め、野菜畑などに運ばれ肥にした。また、「水には神様が居る」といわれ、「川におしっこをしたらちんちんがはれる」と戒めてきた。小便や大便秘はもちろんオムツや下のモノの洗ひ水は

川には絶対に流してはいけない。毎月「おついたち」には清めた塩を流し、年末の大晦日には「水の恩を送る」という習慣もあった。と同時に「三尺流したら水清し」といい、水への信頼もあった。物的に不浄物が水に混じりこまない工夫とあわせて、精神的にも浄めをとりこむ生活文化が息づいていたといえる。

また、これらの川は地域によってさまざまな名称があった。日常のくらしの必要性を強調するのか「使川」という言い方、地域によっては「里川」「里中川」と呼び、人家の間をながれている状況を表した名称もある「みぞっこ」「こみぞ」など大きさを意識させる名前もある。これらの名称から集落ごとにいかに集落内水路と深い生活的かかわりがあったかわかる}とあり、まさしく、この状況の川も「里川」にふさわしいと感じられる。蛇足であるが、大井町の「小路川用水」の「小路」も「みぞっこ」の名称と近い感覚が感じられる。

以上の二点について考えると、

「人々が身近な川や用水に感心を持ち、それを利用または遊びに使用し、それらの人々が肌で感じる程、川や用水を大切にする」

ことが今後の「里川」の基本精神と考えられる。

ii 現在の里川について

現代では、1 の状況を示す川や用水は、ほんの一部の地域で、その中でもわずかな一地域に過ぎず、残念ながら、ほとんどの地域でのその習慣や精神は消滅してしまっている。また、これから「里川」の考えを 1 のような事として考えるには、非常に困難というよりも、現在では出来難い環境にあり、そこで、今後、私達が「里川」を普及し、確立するためには、新しい「里川」の解釈が必要であると考えられる。

そこで、色々と整理してみると、今までの里川の観念で、忘れてはならない基本的な考え方は、利用や遊びの方法ではなくて、「近隣の人々が川や用水に愛着を感じる精神」と思われる。そこで、その精神を引き継ぐためには、私なりに考えると、二項目があると整理した。それは、

- 人々が川や用水に直接入って楽しむ環境
- 近隣の人たちが川や用水を身近に感じ、愛着を感じる環境

にすることである。

イ 人々が川や用水に直接入って楽しむ環境

現在の日本での川や用水の多くは、何れのそれも大なり小なり汚染され、一部では、少々は改善されたかもしれないが、特に、都会の川におてのその汚染はまだ著しい。そこで、各地の河川や用水を人々がそれに直接入れる環境にするには、それ相当の改善が必要とひしひしと感じている。しかし、これらの改善を個人のレベルで行うには大変というよりも不可能に近い。そこで、それらを改善するには行政の力をお願いするしかない。しかし、それら川などの環境整備の中で、里川に感心のあるボランティアの人々が働いて頂く事が大前提である。それなければ、折角の行政の改善も長続きしない。そのことは、行政とボランティアとの両輪の活躍が「里川」を作り上げると考えても言い過ぎとは思わないほど大切な事と思われる。

まず、河川や用水の改善の問題点を下記に示す。

- 川がゴミ捨て場になっている。

何れの川でも、残念ながら自転車や箱、ひどいものでは冷蔵庫などの大きなゴミが川底に捨てられ、そのゴミに小さなゴミも引っかかり、せつかくの川を汚している。それらを捨てる人の気持ちは、全然判らないが、川にゴミがあると捨て易くなるのは事実で、それを防止するためにも、ゴミを直ぐ除去し、常に綺麗な状況にしていくことが大切である。そこで、多くの人々がそれらを行う人々としてボランティアに参加していただく必要性が生まれてくる。しかし、実際には、これに参加して頂く人は少なく、なかなか困難なことと思われる。根本は、川や用水にゴミを捨てないことで、これらの事をPRし、人々に川や用水に対するモラルの啓蒙を掲揚することが必要で、大切なことである。

● 川の浄化能力が失われている。

現在では、産業からの排水による汚染は少なくなってきたが、生活用水からの汚染は多くなったと言われている。その改善として、下水道の整備とその利用者の意識の高揚とが期待されている。しかし、残念な事に、良く耳にすることであるが、家庭用水を下水道に切り替えると、水道料が値上げとなり、それ相当の費用がかかると言って、それをそのまま外の溝などに直接垂れ流している家庭を多く見かける。このような状況で、なかなか川の浄化が進まないのが実際の現状である。そこで、人々に川や用水や海の浄化に対する理解を隅々まで普及するには、大変なことと思われる。それを改善するには、色々な方法があると思われるが、何れにしても、地道に実施することが必要と感じられる。その一つとして、それらの人々に河川の改善の意識を持たせるには、川や用水や海の実情を見て貰い、家庭用用水の浄化の必要性を理解して頂く事もある。これらも行政とボランティアの大きな仕事であると考えている。

それと同時に今まで汚染した川や用水を回復する工夫も大切である。その一つは、汚染している川や用水に空気を多く含んだ綺麗な水を多く流し、浄化能力を増やす方法がある。現在、半田市を含めて、海の近くの都市では、下水処理した水を直接海に流している所が多いが、出来れば、その綺麗になった処理水を近くの川や用水に流して、汚染の浄化の手助けが出来ないかと思う。更に、雨水まで下水道に流す場合があるが、その雨水は直接近くの溝に流し、川や用水に流れ込む工夫も必要な気がする。

また、外部から、綺麗な水を入れ、浄化の手助けする方法もある。この方法は、相当の費用がかかり、行政でお願いするしかないかもしれないが、冬季などの季節的に余った農業用水を可能な限り川や用水に流して、その浄化能力を増やす方法もある。また、ボランティアの人たちで、浄化能力のある微生物を川や用水に撒布して、それらを浄化する手助けや、そこに生育している水性植物、水性小動物、水性動物などの浄化能力のある生物の採取を禁止するなどして、その汚染浄化能力を高める働きも必要と感じる。

それらの働きにこそが、近隣の人たちに川や用水を大切にする気持ちを醸しだす効果があり、家庭から、生活排水を含む汚染源をそこへ流出しないよう協力して頂く環境を作りと思われる。

● 川などの人工化の防止

里川を考えるには、コンクリート製の溝ではどうかと思われるが、実際には、昭和30年代でもかなりの部分がコンクリート製であり、それでも、十分里川の解釈が出来た。そこで利用する人々の姿が里川であり、人工化を云々する必要はない。それでも、春の小川の環境を考えると、その方が芳しく、特に、これからの里川には、自然の魅力も大切な要因で、出来る限り人工化のない、あっても自然を大切にするものが必要と考えられる。しかし、人工的に自然を作り上げるのは、里川の解釈からは程遠いものと思わ

れ、それよりも、その川が人々に利用出来る環境と保全とが大切であると思われる。

以上、三点は里川にするのに大切な要因と思われる。

ロ 近隣の人々の愛着

川や用水が仮に綺麗になっても、そこに住む近隣の人々がそれに愛着を感じなかったならば、それらを「里川」とは考え難い。里川と言うならば、近隣の人々が、川などに対する感心事を持つか作るのが必要である。その一つは、昔、行っていた行事や風習、景観などを、近隣の人々と協力しあって回復する方法であり、もう一つは新しい行事を考え、実行することと思われる。その方法を下記の如く考えてみた。

● 昔の行事と風習

阿木川において、「お盆のときの霊を墓に返す行事で、キュウリやナスを流していたが、それを流すのは中止し、線香を橋の欄干の下に供えるのみの行事をしたり、川に牛蒡の水車の洗浄器を取り付け、その洗浄風景を回復したり、不要な鯉幟を川に流し、あたかも染め布を川に流しているようにしたり」などの行事や風習を回復し、川の風情や情緒を醸しだしたり、川への興味を示す方法もあると思われる。

このように、他の地域でも、それぞれの風習があると思われ、それぞれの風習や慣わし事を回復し、近隣の人々に川や用水の魅力、親近感を持たせる努力が必要である。

● 新しい行事の実施

今、頭の中には、これが良いとの考えがなく、云々出来難いが、他の川や用水での行事を真似して、この川や用水の行事として確立する方法や、新しい考え方として、若者たちに川や用水に関する新しい行事を考え、長くその行事を行って風習として完成していく方法もある。

● 水辺の動植物の育成

川や用水などの堤防や土手をそのまま放置しておく、草木が伸び放題となり、また、水辺の植物も異常に繁茂すると、人々の川や用水の関心が薄らぐ可能性が多くなり、それらを解決するには、何時もそれらの状況を観察し、管理して頂く人々が必要である。その最も理想的な事として、その近隣の人々が集まって、草刈などをして、川や用水を管理し、親身な関心を持って頂く事であるが、それがなくても、ボランティアの人たちや行政で、一定の期間、管理してもらい、その自然を保持して頂く必要を感じる。その環境整備の結果、川や用水に、春は蝶々が、夏には蛍やトンボが、秋にはアカトンボが飛び回り、冬には鴨が水面に休んでいる風景を見れば、近隣の人々も川や用水に感心を持って頂けるのではないかと考えている。また、水生植物や動物が繁殖すれば、魚釣り、水あそびが出来るようになる。

しかし残念ながら、最近の大人たちは、子供たちに川や用水は危険と言って遊ばさないようにしており、少しでも、自然の大切さを子供達に植え付ける努力はして貰いたいものである。

iii 終わりに

上述の如く、里川について話しを進めてきたが、まだまだ、これから「里川」として身近な河川や用水などを回復するには、いろんな面で解決しなければならない事は多くある。しかし、「里川」がなくなったと悲しむよりも、川や用水などを「里川」にする環境を広げて頂きたい。当然、行政とボランティアの協力は

必要であるが、それよりも身近な人々によって川や用水を「里川」にする工夫して貰いたい。そして、近隣の人々が川や用水を、それらの利用とまではいかななくても、安らぎのある場所として、身近に感じ、散歩や遊び場としてその場所を求めて貰えれば、それでも「里川」と考えられ、里川の解釈を広げても良いでないかと思われる。更に、真の近隣の人々が身近に、直接それらに接触し、感じて、深く肌で感じて頂ければ真の「里川」として確立されて行くと思われる。

是非あちらこちらで、川や用水が「里川」と言われるような雰囲気になりたいものである。

参考文献

- ・ 水辺ぐらしの環境学 琵琶湖と世界の湖から
発行 2001年12月20日 著者 嘉田由紀子 発行者 斎藤万壽子 発行所 昭和堂
- ・ 知っているようで知らない「水」の不思議
発行 1995年11月25日 発行者 大和謙二 監修 北野大 発行所 大和書房